『ハヤーティー史』におけるジュナイド

矢　島　洋　一

Junayd in the *Tārīkh-i Ḥayātī*

Yajima, Yoichi

Among the *shaykh*s of the Safavid Sufi order, Junayd has been among the most enigmatic because of the scarcity of sources for his supposed significance in the history of the order. So far, we have had only brief descriptions of him in the Safavid historiographies and fragmentary references to him in non-Safavid sources. However, the recently discovered *Tārīkh-i Ḥayātī*, a Safavid history written during the reign of Ṭahmāsb I, offers some unique information about the personal history of Junayd as well as the history of the order itself. This paper aims to reexamine the activity of Junayd and its background based on the new source.

Junayd was exiled from Ardabīl by his uncle Jaʿfar, who was supported by the Qaraqoyunlu ruler Jahānshāh. The Aqqoyunlu ruler Uzun Ḥasan sided with Junayd against his rival and married his sister to him. Junayd invaded and plundered Trabzon with the military support of Uzun Ḥasan, which seems to have served well in the latter's diplomatic negotiations with the Empire of Trebizond. His invasion of Samtskhe can also be assumed to have been a factor involved in international relationships. His fatal expedition to Shīrvānshāh followed.

Junayd's wandering life was a product of both the conflict between the Safavid family and the struggle between the Turkmen dynasties. His military activities in connection with Uzun Ḥasan's power and authority became not only a basis for the later militarization of the Safavid Sufi order but also a factor in the political and diplomatic situation at that time. The *Tārīkh-i Ḥayātī* reveals Junayd's significance in the history of the order as well as of contemporary northwestern Iran, Anatolia, and Caucasus.

はじめに
1. 『ハヤーティー史』の発見
2. おじジャアファルとの確執
3. ウズン・ハサンとの姻戚関係
4. トラブゾン侵入
5. サムツヘ侵入
6. ジュナイドの最期
おわりに

Keywords: Safavid Sufi order, Junayd, Uzun Ḥasan, Trabzon, Samtskhe
キーワード： サファヴィー教団，ジュナイド，ウズン・ハサン，トラブゾン，サムツヘ

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

はじめに

サファヴィー教団はその歴史の中で三つの力を順次獲得していった。まず始祖サフィー・アッディーンの時代に聖者一族としての求心力を帯び，サドル・アッディーンの時代に経済力を得て，ジュナイドの時代に軍事力を具えたのである。そしてその三つの力を背景としてサファヴィー朝を建設したのがイスマーイール 1 世だった。

うちサフィー・アッディーンについて伝える同時代史料は少ないものの，後に教団内で作られた聖者伝が多くの情報を伝えている。サドル・アッディーン時代の蓄財については，不動産目録等を通じて他のスーフィー教団と比べても珍しいほど詳細に知ることができる。イスマーイールについては言うまでもなくサファヴィー朝内外に豊富で多彩な史料が現存する。しかしジュナイドについては，サファヴィー朝史書の冒頭に置かれたサファヴィー教団史の中の簡略な記述や，非サファヴィー朝史料における断片的な言及以外に情報がなく，教団の性格が大きく変貌した重要な時期であるにもかかわらず不明な部分が多かった。しかし最近，サファヴィー教団史に関する重要史料『ハヤーティー史』が発見されたことにより，ジュナイド時代についても従来よりはるかによく知ることができるようになった。本稿は，同書に基づいてジュナイドの活動とその背景について再検討することを目的とする。

1.『ハヤーティー史』の発見

初期サファヴィー朝史の主要史料の一つ，クンミー『歴史の精髄』の序文には，著者が参照した六つの史書の著者達が列挙されている［*Khulāṣat*: I 3］。うち五人は既知の史書の著者だったが[1]，残る一人，ハヤーティー Mawlānā Ḥayātī Tabrīzī なる人物の史書は知られておらず，散逸したと考えられていた［Glassen 1970: 12; Quinn 2000: 43］。しかし 2017 年，キューマルス・ゲレグルーはイラン国立図書館 No. 15776 写本（1039 年シャーバーン月/1630 年 3–4 月書写）がハヤーティーの史書を含むことを報告し［Ghereghlou 2017］[2]，翌年早くも校訂本を出版した［*Ḥayātī*］。題名は本文中では「歴史（tārīkh）」とのみ言及されているが，校訂者により『ハヤーティー史 *Tārīkh-i Ḥayātī*』と呼ばれており，ここでもその呼称に従うことにする。

この発見により，『ハヤーティー史』はタフマースブ 1 世時代に書かれたサファヴィー教団時代からサファヴィー朝初期の時代を含む史書であることが判明した。同書の序文に述べられている章立ては実際の構成とは異なるため（表），原形から改変された，あるいは他作品と混淆した写本である可能性もあり，その成立過程に関してはなお検討の余地がある。しかし同書にはサファヴィー教団史について他書に見られない独自情報が非常に多く，今後当該分野において必須の史料になるのは間違いない。『ハヤーティー史』自体についてはゲレグルーの解説に譲り，本稿ではジュナイドに関する同書の記述について，特に重要と思われる部分を訳出しながら検討していくことにする。

2. おじジャアファルとの確執

ジュナイドは，カラ・コユンル朝ジャハー

1) その五人とは以下の通り。Amīr Sulṭān Ibrāhīm Amīnī Haravī（*Futūḥāt* 著者），Mīr Yaḥyā Sayfī Qazvīnī（*Lubb* 著者），Mīr Maḥmūd valad-i Mīrkhvānd (sic.) Haravī（*Ẕayl* 著者），Qāżī Aḥmad Ghaffārī（*Jahān-ārā* 著者），Ḥasan Beg Rūmlū（*Aḥsan* 著者）。

2) ゲレグルーはその前年に『ハヤーティー史』を利用して「ハイダル」の項目を *Encyclopaedia Iranica* に寄稿している［Ghereghlou 2016］。

表　『ハヤーティー史』の内容

序文での章立て［*Ḥayātī*: 28］	実際の構成	刊本頁
	序文	1–
第 1 の庭　アリー	第 1 の庭　アリー	29–
第 2 の庭　12 イマーム	第 2 の庭　12 イマーム	30–
第 3 の庭　サフィー	第 3 の庭　サフィー	41–
第 1 の園　サフィーの特性（含 9 芝）	第 1〜8 の芝　サフィーの生誕ほか	42–
第 2 の園　サフィーの系譜	第 2 の園　サフィーの系譜	61–
第 3 の園　サフィーの道統	第 3 の園　シャイフ・ザーヒド	68–
第 4 の園　シャイフ・ザーヒド	第 4 の園　サフィーの道統	72–
第 5 の園　サドル・アッディーン	第 2 の枝　歴代シャイフ	77–
第 6 の園　歴代シャイフたち	補足　サドル・アッディーン	81–
第 7 の園　アルダビール廟	アルダビールの教団施設	
第 8 の園　弟子たち	補足　歴代管財人	89–
	補完　サドル・アッディーン	90–
	補足　高弟たち，弟子たち	94–
	補足　サフィー廟周囲に埋葬された弟子たち	98–
	第 5 の園　歴代シャイフの没年・家族など	110–
	ジュナイド	123–
	ハイダル	142–
	スルターン・アリー	179–
	イスマーイール	200–371

※庭（ḥadīqa），園（rawża），芝（chaman），枝（shuʿba），補足（tazyīl），補完（takmilat）

ンシャー Jahānshāh（在位 1438–67）と結託したおじジャアファルによりアルダビールを追われる。サファヴィー朝・非サファヴィー朝史料とも，ジュナイドについて言及する際にジャアファルとの確執については触れないか［*Futūḥāt*: 36–43; *Lubb*: 269; *Silsilat*: 139–140; *Ḥabīb*: IV 425–426; *ʻĀlam-ārā*: 259–265］，軽く示唆するのみであるが［*Khulāṣat*: I 34–36; *J̌ahān-ārā*: 261–262; *Aḥsan*: II 601–602; *Âşıkpaşazâde*: 330］[3)]，『ハヤーティー史』ではより詳しく両者の関係が述べられている。

管財人職（tawliyat）は最初，聖者たちのスルターン，サドルの指名と遺言により，スルターン・ハージャ・スルターン・アリーに帰した。かのお方はマッカに向かう際，管財人職をハージャ・シャイフ・シャー（・イブラーヒーム）に命じた。そのお方からは，聖者性の諸国のスルターンたるアブルガーズィー・シャー・ジュナイドが受け継いだ。しかし，シャイフ・ジャアファルは彼に権限を与えず，彼の手をその仕事に触れさせなかった。彼の後は完全なる導師，スルターン・ハイダルに属した。

3)　そのためか，サファヴィー教団に関する代表的な研究でもジャアファルの扱いは僅かである。たとえばグロンケは（初期教団史を中心に扱った研究であるとはいえ）ジャアファルについては注でわずかに 1 回言及するのみであり［Gronke 1993: 277］，マッザウィーに至ってはその名に触れすらしない［Mazzaoui 1972］。ロエマーは，ジャアファルがジュナイドのシーア派傾向を嫌った可能性に触れるが，本人も述べるように根拠があるわけではない［Roemer 1989: 235］。シュティッケルによるサファヴィー教団に関する最新の研究においてもジャアファルへの言及は少ないが，上のロエマーの見解に対して「単に教団の指導権が欲しかっただけかもしれない」という推測を付け加えている［Stickel 2019: 104 n. 119］。

シャイフ・ジャアファルは，彼らの間に結び付きができるまで[4] 彼（ハイダル）にも関与させなかったが，彼（ジャアファル）の後は，管財人職は彼（ハイダル）のものとなった。［*Ḥayātī*: 89］

『ハヤーティー史』もサファヴィー朝史料である以上，イスマーイールの直系先祖であるジュナイドやその息子ハイダルがサファヴィー教団の正当な長であるという前提には立っているものの，二人が教団の指導権を実質的に喪失していたことを明言している。ジュナイドをサフィー・アッディーンから数えて五代目の教団指導者とする従来の理解は，あくまでサファヴィー朝の見解に則ったものであり，少なくとも教団経営については実態を反映していないと言えるだろう。また，このような『ハヤーティー史』の直截的な性格がサファヴィー朝において忌避されて写本がほとんど伝存しない一因となった可能性もある。

このジュナイドとジャアファルの対立は，当時のイランにおけるカラ・コユンル朝とアク・コユンル朝との対立と連動したものだった。

当時，ミールザー・ジャハーンシャーがアゼルバイジャンと両イラクの支配者だった。彼の苛立ちの思考に，かの指導者の天の三日月（ジュナイド）が日に日に成熟の月齢を増していき，まるで太陽の如く天空に昇るであろうという考えが閃いた。彼は自分の王権が陰ってしまうことを心配し，導きの玉座の帝王すなわち気高き十全なる導き手，アブー・アルワラーヤ・シャイフ・スルターン・ハージャ・アリーの息子の一人シャイフ・ファリード・アッディーン・ジャアファルに手紙を送り，自発的にでも強制的にでもかのお方（ジュナイド）を子供や追従者たちと共にアルダビールから追い出し，留まる機会を与えないように，と伝えた。そのシャイフ・ジャアファルはミールザー・ジャハーンシャーの娘の一人を自らの息子サイイド・カースィムに娶せて親類関係の鎖を強化し，彼の幸運の視野に反逆の覆いをかけていたので，彼に植え付けられた本性にして崩れた性質である悪しく醜い本質によって（ジュナイドとの）親戚関係の絆を血縁を切る裁断具と「我と汝との間には，二つの東の隔たり」（Q43-38）の対立の鋏で断ち切り，アルダビールの住民だったシャー・シュジャーウを遣って「ミールザー・ジャハーンシャーの命令によって，あなたはアルダビールに留まることができそうにありません」と（ジュナイドに）伝えた。敬虔者たちのスルターン（ジュナイド）は同じ使者を通じてこう伝えた。「私はいくら自らの使者を躊躇いの道に送り，理解の飛脚を思案の道に派遣しても，親類関係と友好の道に反して一致の道から外れたなどという情景は見えません。なぜならあなたは理由もなく恐れの埃を親交の鏡にかけ，一致の輪から足を踏み出し，追従の鍵で圧制の扉を開いており，わけもなく親族関係の巻物を「まるで書き物を巻き上げるように」（Q21-104）巻き取り，調和のカアバ聖域の周りを不和の歩みで回っているからです。」［*Ḥayātī*: 125］

このように，姻戚関係を通じてカラ・コユンル朝ジャハーンシャーと結びついていたジャアファルによってジュナイドはアルダビールを追放された。ここではジュナイドの将来性に警戒心を抱いたジャハーンシャーがジャアファルを操ったことになっているが，動機としてはやや不自然に思える。むしろ，教団の指導権を巡るおじと甥の争いに，前者の後ろ盾であったジャハーンシャーが介入したと考える方が自然だろう。ジュナイドはアルダビールを離れるとき弟子達を連れて

4） ハイダルがジャアファルの娘を娶って和解したことを指す（後述）。

おり，うちルームから来ていた一派の勧めに従ってディヤールバクルに向かってハサンカイフに落ち着き［*Ḥayātī*: 126–127; *Ḥabīb*: IV 425; *Ẕayl*: 47; *Futūḥāt*: 38］，そこでジャハーンシャーと対立するアク・コユンル朝ウズン・ハサン Uzun Ḥasan（在位 1452–78）に接近することになる。

3. ウズン・ハサンとの姻戚関係

ジュナイドがウズン・ハサンの姉妹ハディージャ Khadīja を娶ったことは多くの史書で触れられているが，『ハヤーティー史』でもウズン・ハサンからの手紙をも引用しつつ以下のように述べられている。

> その間に，敬虔者たちのスルターンの喜びを必然とする歩みの到着を，正義と善行の旗を掲げる今は亡き喜びの帝王，アブー・ナスル・スルターン・ハサン・バハードゥル・ハーン（ウズン・ハサン）が知った。このカリフの地位をもつ一門に対する彼の誠意と信頼は完全であったので，舌を「神に讃えあれ。彼は我々から苦しみを取り去ってくださったお方」（Q35-34）という感謝の働きへと開き，彼の高貴なる到着を大切な機会と見做した。そしてかのお方への手紙を書き，巻物の中で自らの誠意と信頼を表明した。手紙の内容は以下の通りである。
>
> 「神に讃えあれ。彼は善き者の面前に勝利の門を開き，その望みの顔の上に贈物と恩恵の布をかけたお方。
>
> 目や心により名が刻まれる前に
> 恋人の顔の像は魂の鏡にある
>
> 存在の詩が「神の友たちには恐れがなく，彼らは憂うこともない」（Q10-63）という集いの上席たちの合意によって開句から作られ，目証の光が「彼らは自らの主の導きの上におり，彼らこそ栄誉を受ける者たちである」（Q2-5）という人々の信頼の地平からすべての地平に照ったとき，善に連なる思考は常に幸運の顔を，聖者性の階位にしてカリフ位の宿所，到達の国の総督にして創出の仕事場への寄進者，主の開示の閃光の昇る場にして神の慈愛の息吹が吹く場，唯一性の花園で歌う吉報のサヨナキドリの集いの中で独座する者，正しき聖法の旗を掲げる者にして不信仰者たちや反抗者たちの民を平定する者，王であり富める者であり力ある神の恩寵によって神の道を行き導きの道に向かう者たるお方，シャー・ジュナイド・フサイニー・サファヴィー――神が彼の存続によってそのカリフ位の場を上げ，彼の出会いによって聖者性の眼を喜ばせますように――の誠実なる信仰の鏡に映しています。そして神の恩寵の幸運と，果てしない援助の美徳によって，我らの輝く思考において確信されました。幸運と吉兆の日々の存続や，カリフ位と王位の柱の固定は，「商いや売買に惑わされずに神を念ずる人々」（Q24-37）の高貴な言葉が彼らの状態を記述しているような，開示と奇跡の持ち主，歓喜と心的状態を備える者たちの大志の幸運と全き美徳に拠っているのだと。特に，聖者性の徴たる一族にして導きの巣たる一門である清浄なるサファヴィー家は，各々が慎みと請願の手を彼らの愛の絆にかけて，彼の栄誉と幸運の手段をそなえており，嘲笑の歩みによって反抗の道を歩む者は皆「それは汝の主には決定済みのこと」（Q19-71）という望みの大木を引き抜こうとしているのです。神のおかげで，我らの願望はこの救いの一派の友好の雨の滴によって潤され，我らの状態の池が水を湛える庭園はこの一族の愛の泉によって喜んでいます。遠隔のために邂逅の繋がりが達成の絆に結び付いていないとはえ，王の性質の本質を聞いたことで，判断の完全なる強化によって意志と信頼の繋がりは「（天の）堅固な七（層）」（Q78-2）という土台をそなえています。この贈物が

首尾良く実現することを望みます。神の導きに従う者に平安あれ。」

彼（ウズン・ハサン）は，自らの貞淑なる姉妹のうち一人の気高き女性を聖者性の拠り所たるスルターン（ジュナイド）に娶せることにした。使者がメッセージを伝え，かの高位の帝王の完全なる合意と誠意を敬虔者たちのスルターンに申し上げると，（ジュナイドは）その内容に大いに喜び，その意思を祝福された吉兆なるものと見做した。その後，純潔の夫婦部屋の貞淑なる女性ヒルヤ・アーガー・ベギ――ハディージャ・ベギムとして知られ，暗い夜にその顔を見た者は地平線の帳から日が昇る誠実なる朝になったと思い，もし人々の目と目の瞳が闇の帳の中で彼女の美しい顔を見たら，ヒジャーブのために輝いた世界を照らす太陽だと思った――は，カリフ位の王座の許に連れられて来た。そして，「神の命令は実行されなければならない」（Q33-37）という帳簿から「我らは彼の妻を彼に相応しくした」（Q21-90）という治癒の姿がかのお方と貞節なる女性との間に生じていたので，永遠なる幸運が時代のビルキースを善の視野にもたらし，支配の角を統治の王座の隅に座らせた。［*Ḥayātī*: 127–129］

ここで，『ハヤーティー史』の記述は従来知られていた史料と食い違うようになる。アルダビールを追放されたジュナイドの行先について最も具体的に語るのはサファヴィー朝史料よりはむしろオスマン朝史料『アシュクパシャザーデ史』であり［*Âşıkpaşazâde*: 330–332］，ジュナイドの足跡を辿る従来の研究もそれに拠る部分が大きい［Hinz 1936: 25–32; Yacızı 1993: 124］[5]。同書によれば，「おじに腹を立てた（emmisine küsdü）」ジュナイドはルームのオスマン朝君主ムラト 2 世（在位 1421–44, 1446–51）の許に赴き，続いてカラマン→コンヤ→ヴァルサク→ハラブ→ジャーニクと遍歴してからトラブゾンに侵入して荒らし，その後ウズン・ハサンのところに行ってその姉妹を娶ったという。これは『ハヤーティー史』の記述とは二つの点で一致しない。まずルームからジャーニクに至る遍歴は，単にディヤールバクルとハサンカイフの地名しか挙げない『ハヤーティー史』とは異なっており，また『ハヤーティー史』によればジュナイドのトラブゾン侵入はハディージャとの婚姻の後のことである。この問題を考えるために，まずはそのトラブゾン侵入について検討してみよう。

4. トラブゾン侵入

『ハヤーティー史』ではジュナイドのトラブゾン侵入について以下のように述べられている。

日に増す幸運の同行者たる主の恩恵の使者，吉兆の鐙の随行者たる天の援助の軍隊は，聖戦の旗を篤信なる意志と善良なる信仰の軍に掲げ，進行の手綱をトラブゾンへと向けた。そして明瞭なる信仰への助力を（神に）求め，不信仰者たちや多神教徒たちの旗の転覆するため，「神は偉大なり」「アッラーの他に神なし」の雄叫びを世に上げた。その境域に着くと，トラブゾンの総督は主の恩寵を受けた軍隊の到着を知って戦いの用意をした。当時ディヤールバクルのスーフィーたちとスルターン・ハサン（ウズン・ハサン）が勝利と結びついた鐙の随行者としていた軍からなるイスラーム軍は五千より多くはなかったが，彼らは神の助力に頼ってこの詩を口にした。

戦いの日だ，戦いをなせ
名誉を得るよう努めよ
目指す戦場が広がるまで

5） ただし *Encyclopaedia Iranica* の「ジュナイド」の項目は『アシュクパシャザーデ史』を参考文献には挙げているものの，以下に述べる遍歴については触れていない［Babayan 2009］。

腹帯を馬に締めよ
沸き立つ時は若さを求めよ
奮闘の時は引き延ばせ
戦闘の日には戦いの手を
豹の口に入れよ

隊列が並び，槍先の歯は微笑みの中に，損傷の風は呼吸の中にあり，死期の唇は希望の顔に微笑みかけ，教訓を得る目は勇士たちの状態を見て泣いた。

剣の閃光がきらめいた
勇者たちは獅子の如く攻めかかった
槍は胸を次々と貫き
刃は脳天に傷を与え
地面は血でルビーの如く赤くなった
血の洪水がジャイフーン川の如く流れた

世を照らす太陽が星々の軍を敗走させようと天の白馬に乗った時から，恒星と惑星の首飾りが天空の首にかかって闇の宦官が不信仰と信仰の間に介入した時まで，イスラーム軍の不信仰者たちに対する攻撃は続き，獲物を捕らえる剣の打撃は増した。結局不信仰者たちの軍隊が撃破され，その民の多くが聖戦の剣によって「彼らの避難所は地獄である。何と悪しき寝床であろう」（Q3-197）の宿営地に旅荷を運んだ。逃走を図った一団もいたが，勝利の徴をもつ聖戦士たちは彼らを追跡してきらめく剣の的とした。金・宝飾・宝石などの戦利品の多さや捕虜の多さは，知性の勘定係でさえその計算ができないほどだった。

ルビー・紅玉でさえ物の数ではなくなり
金銀にとっては市場も廃墟となり[6)]
女や男の捕虜であふれ
その年貧しい者はいなくなった

その後（ジュナイドは）目標の手綱をトラブゾン城塞の征服に向けた。城砦内にいた多神教徒たちは躊躇いもなく降りて来て城砦を引き渡した。敬虔者たちのスルターンは偶像堂の破壊と偶像の打ちこわしを命じた。短時間で教会の建物と多神教徒たちの礼拝所は壊滅させ，アブラハムの如く良き信仰の火種と借り火のキリスト教徒の息により偶像を破壊し，多神教徒たちをイスラームの栄誉に浴させた。そしてかつて「彼の両親はユダヤ教徒かキリスト教徒」という教師から「神は三（位）の三番目である」（Q5-73）と吹き込まれていたが，「知れ，アッラーの他に神はなし」（Q47-19）と言うようになり，「ムハンマドは汝らのうち誰か父親ではない。しかし神の使徒であり預言者たちの封印である」（Q33-40）の意義を承認した。敬虔者たちのスルターンはそこから無事にハサンカイフに向かった。スルターン・ハサンが信仰に誠実な聖戦士たちのこの明確なる勝利を聞くと，安堵の花園に希望のバラが咲き，彼の状態の庭園は瑞々しく緑になった。［*Ḥayātī*: 130–132］

このトラブゾン侵入については他のサファヴィー朝史料における言及は少なく，タフマースブ1世時代の二つの史書で僅かに触れられているに過ぎない。まずガッファーリーは「（ジュナイドは）そこ（ディヤールバクル）から勝利の徴を持つガーズィー達の一隊と共にトラブゾンに対する聖戦に向かい，その後チェルケス人に対する聖戦を意図してシルヴァーンに出立した」［*J̌ahān-ārā*: 261］とごく簡単に述べるのみで前後の事情には全く触れない。一方ブーダーク・ムンシーはジュナイドとハディージャとの婚姻について触れた後，「しばらくしてから彼（ジュナイド）はトラブゾンの方に行き，860年にそこで殉教した」［*J̌avāhir*: 109］と述べるが，没地・没年とも誤っている。一方『アシュクパシャザーデ史』は「（ジュナイドは）そこ（ジャーニク）からトラブゾンに向かった。トラブゾンの長（beğ）も軍を

6) あまりに多くの戦利品を得たため，それと比べると普段多くの財物が飛び交っている市場さえまるで廃墟のように侘しく見えるほどだった，の意。

集めて迎え撃った。（ジュナイド軍は）トラブゾン軍と戦った。トラブゾン軍を破った。トラブゾン地方を荒らした。」と述べている［*Âşıkpaşazâde*: 331］。

従来知られていた史料の中でこの出来事を最も詳しく記すのはビザンツ史料，特にラオニコス・カルココンデュレスの史書である。同書によると，「アルタビレス（Artabilēs < Ardabīl）という名のズュケス（zychēs < shaykh?）」の侵入を受けたトラブゾン側は水軍をも投入して迎え撃とうとしたが，結局皆逃げ出してしまったという［*Chalkokondyles*: 308–313］。シュクロフはこの「アルタビレス」をジュナイドに比定し，当時のポントス地方における疫病流行の年代や，ジュナイドに続いてトラブゾンを襲ったオスマン朝の将軍ヒズル Khiżr（Ḫıżır）の行動の年代比定などを根拠に，その侵入を 1456 年初夏の出来事と推定する［Shukurov 1993］。5 年後の 1461 年にトレビゾンド帝国はオスマン朝によって滅ぼされるので，同帝国再末期の事件ということになる[7]。

以上の既存史料に対して『ハヤーティー史』が新たに加える情報は，この行動とウズン・ハサンとの密接な繋がりである。ジュナイド軍にウズン・ハサンからの援軍が加わっていたこと，またその戦功にウズン・ハサンが満足したことに触れられている。トラブゾンは当時ウズン・ハサンの支配域の外縁部にあたっており[8]，彼にとってジュナイドへの協力は支配域周辺での軍事活動の一環だったと思われる。また同時にウズン・ハサンは 1456 年以降トレビゾンド帝国と同盟交渉を進めており，1458 年にヨアンネス Iōannēs 4 世（在位 1429–58）の弟で直後にその後継者ともなるダヴィド David（在位 1458–61）の娘デスピナ Despina を娶っている［Woods 1999: 88］。ウズン・ハサンにとって，ジュナイドのトラブゾン侵入はトレビゾンド帝国に対する揺さぶりとなり，その交渉を有利にする材料の一つとなっただろう。

なおウズン・ハサンとデスピナの娘マルタ Marta（ハリーマ Ḥalīma，アラムシャー ʿAlamshāh とも呼ばれる）とジュナイドの息子ハイダルとの間に生まれたのがイスマーイールである。サファヴィー朝史料におけるこの侵入に関する言及の少なさは，王朝創設者の父方の祖父が母方の祖母の郷里を侵略したことへの言及を避けた結果かもしれない。

ここで再び前述の『アシュクパシャザーデ史』と『ハヤーティー史』との齟齬について，ジュナイドのトラブゾン侵入を当時の国際関係の中に位置付けつつ検討すると，やはり後者の方が信憑性が高いようである。『アシュクパシャザーデ史』に基づけば，ジュナイドは各地を放浪した後に何の後援もなくトラブゾン軍を圧倒し，その後にトレビゾンド帝国と同盟交渉中のウズン・ハサンと姻戚関係を結んだという，不可能とは言えないまでも聊か不自然な状況を想定しなければならなくなる。それよりは『ハヤーティー史』が伝えるように，姻戚関係を背景にウズン・ハサンから兵力を借りたジュナイドがトラブゾンを荒らし，ウズン・ハサンはそれを圧力としてトレビゾンド帝国との外交交渉に利用した，と考える方が自然だろう[9]。

7） ただし，カルココンデュレスの記事ではこの侵入がヨアンネス 4 世の即位（1429 年）に続いて「しばらく後（meta de tinas chronous）」のことだとされており，ジュナイドの活動期には合わないことになる［Savvidēs 2009: 150］。しかしこのトラブゾン侵入に関する箇所は同書に対する同時代の加筆であることが知られているので［Kaldellis 2014: 21–22］，別典拠からの挿入時に年代的な齟齬が生じたと考えられる。

8） 当時のウズン・ハサンの支配域を示す地図として，Woods［1999: 76］や Hewsen［2001: 142］を参照。

9） ロエマーはジュナイドのトラブゾン侵入はウズン・ハサンの宮廷に現れる前であったことを前提に，ジュナイドが自分の保護者であるウズン・ハサンの宮廷からその親類への攻撃に向かうことは考え難い，と述べているが［Roemer 1989: 238］，ウズン・ハサンがトレビゾンド帝国と姻戚関係を結んだのはその侵入の 2 年後のことである。

その後ジュナイドはアルダビールに帰ろうとするが，やはりおじジャアファルに阻まれることになる。

（ジュナイドは）ディヤールバクルから教導の家アルダビールに向かった。ミールザー・ジャハーンシャーは敬虔者たちのスルターンがアルダビールに入る前に，かのお方がスルターン・ハサンと一致と友好の姻戚関係を結んでいたこと，また彼らがディヤールバクルから故郷に向かっていることを知り，再び急使によってシャイフ・ジャアファルに手紙を送った。「今回はシャイフ・ジュナイドを出迎えてやれ（＝殺せ）。もしその狙いが実現しなければ，再び町から追い出せ。」シャイフ・ジャアファルは再び敵意と反抗の旗を掲げ，羞恥の文字を自らの状態のページから抹消した。そしてアルダビールの人々を，かのお方（ジュナイド）を子供や追従者共々殺害と追放をするよう促し，自らの冷酷な弁明と忘恩の心を「岩のように固く，いやもっと固く」（Q2-74）し，男気や親類関係をまったく顧みなかった。［*Ḥayātī*: 132–133］

ジュナイドは一度はアルダビールに入ったものの，人々の敵意を感じたため結局そこを出て，数日間町の外に留まった後にシールヴァーンシャーとの戦いに向かうことを決心する[10]。

5. サムツヘ侵入

次いで『ハヤーティー史』は，ジュナイドの「クルクラのグルジスターン（Gurjistān-i Qurqura）」侵入について述べる。クルクラとは，南西グルジア～北東アナトリアのサムツヘ Samtskhe（中心都市アハルツィヘ Akhaltsikhe）を指す。この地方はイルハーン朝期以来アタベクの称号を与えられたジャケリ家が統治しており［北川 1977; Bedrosian 1979: 182–185; Kırzıoğlu 1992: 148–162; Peacock 2012］，クルクラとは君主名クヴァルクヴァレ（Q’varq’vare）に由来する。当時の君主もクヴァルクヴァレ 2 世（在位 1451–98）である。

トラブゾンに対する聖戦の後，栄光の旗はクルクラのグルジスターンの方へと進撃の手綱を向けた。なぜなら敬虔者たちのスルターンは[11]，多神崇拝と頑迷さの持ち主たちに対する聖戦への限りない志向と言葉にできないほどの望みを持っていたからである。そして彼は，「財産と生命をかけて神の道において努力した者たちは，神の許で最高の位階を得る」（Q9-20）という気高き報酬を望み，一時たりとも寝床で休息することはなかった。そして再び聖戦の旗はハサンカイフから移動を重ねて二千人の憎悪を抱く戦士たちと共にクルクラのグルジスターンの周囲に到達した。クルクラは勝利の痕跡をもつ軍隊の到着を知ると，不信仰者たちからなる無数の兵を集めて敬虔者たちのスルターンを迎えた。しばらくして両隊列が激突した。

山の如き両軍は動き出し
　その鳴動で世界が慄いた
角笛の呻き声がとどろいて
　手足に熱と震えが生じた

聖戦士たちのバフラームの報復の剣が突然の厄災の如く不信仰者たちの頭上に振り下

10）『ハヤーティー史』はこの部分に続けて，信頼できる情報によればジュナイドがアルダビールに向かった時既にジャハーンシャーは死んでいたことが分かる，と言い添えているが，年代的にはあり得ない。またシュティッケルは *Ḥabīb* 等を根拠に「ウズン・ハサンはジャハーンシャーに勝利した後ジュナイドを再びアルダビールに据えた」と述べているが［Stickel 2019: 103］，史料の当該部分にそのようなことは述べられておらず，何らかの誤解と思われる。

11）原文 sulṭān al-azkiyā’ の後に後置詞 -rā を補って読む。

ろされ，血を吸う矢の鏃が正確な意味の如く心臓に突き刺さった。血液は血管内で沸騰し，心臓は身体の中で叫んだ。剣は頭の中で奥まで達し，槍の舌は霊魂と共にしゃべり出した。

混乱が起こり，戦いは続いた
　誰もが剣と矢に手をかけ
剣はよく研がれて輝き
　一瞬たりとも仕事を怠らなかった
槍はよく肝臓に達して
　ただちに胸の秘密を知らせた

そして，夜色の黒き幕の軍団が青き日の幸運の額に突撃し，中国からホータンまで，イエメンからアデンまでを暗黒にした。

夜の麝香の巻毛が梳られ
　夜陰の印が世に書きつけられた

戦闘の門が開かれた。不信仰者たちの軍は自らの状況のページに無力と危機の跡を見いだすと，手を逃走の裾にかけ，堅固な場所と堅牢な地に避け場を求めた。勝利の行為たる聖戦士たちは彼らを追跡し，略奪の手をグルジア人たちの財産に開き，村々や地域から多くの戦利品を手にし，無数の捕虜を得てそこから移動してアゼルバイジャンに向かった。［*Ḥayātī*: 134–135］

ジュナイドのこのサムツヘ侵入については他史料には記録がほとんどなく，わずかに『アシュクパシャザーデ史』がジュナイドが不信仰者に対する聖戦のためにアヒスハ（アハルツィヘ）とグルジスターンに向かうことに触れているのみである［*Âşıkpaşazâde*: 331］。またこの出来事はグルジア側の史料にも記録がないが，もともとこの時代はグルジア史料の空白期なので[12]，史料上の記述が僅少であることはジュナイドのサムツヘ侵入自体を疑う理由にはならない。むしろ『アシュクパシャザーデ史』が僅かに触れている出来事が『ハヤーティー史』によって確認されたと考えるべきだろう。

この『ハヤーティー史』の記述からは単にジュナイドがサムツヘを侵略し略奪行為をなしたという事実しか分からないが，諸史料に見える以下の三つの情報は，この侵入の意義を考える手掛かりになると思われる。

(1) アルメニア史料トヴマ・メツォペツィ『ティムールとその後継者の歴史』に，アルメニア暦 889 年（ユリウス暦 1440 年）にジャハーンシャーが「アルダビールの邪悪な指導者とすべてのカーディーとムダッリスを（ev zchʻar arrajnordn Artavilu ev zamenayn ghati ev zmutarris）」連れてグルジアに侵入したという記事が見える［*Tʻovma*: 119–120; Javakhishvili 1948: 40］[13]。この「アルダビールの指導者」がサファヴィー家の人間であるとすれば，時期的にはジュナイドの父ハージャ・アリーを指すと思われるが，ジャハーンシャーと結んでいることからジャアファルかもしれない。いずれにせよ，アルダビールの有力者がグルジアに侵入したのはジュナイドが初めてではなかったことになる。

(2) ウズン・ハサンも何度か対グルジスターン遠征を行っており，うちジュナイド存命中に行われたものがグルジア・ペルシア・アラビア語史料に見える［*Kartlis*: 477; Brosset 1849: 687–688; *Diyārbakrīya*: 376 ff.; *Ḥawâdith*: 321; Woods 1999: 253–254 n. 5］。ただしその年代には史料により相違がある

12）所謂『グルジア年代記』は 14 世紀で断絶しており，18 世紀になって編纂された『新グルジア年代記』も 15 世紀については極僅かな記事しかない。そのためグルジア史の概説でもこの時代については記述が少ないのが常である。ピーコックによるジャケリ家の通時的研究でもやはりこの時代に関する情報は少ない［Peacock 2012: 56］。

13）カラコユンル朝とティムール朝との抗争に乗じて独立を強めていたグルジア王アレクサンドレ Aleksandre 1 世（在位 1412–42）は，ジャハーンシャーへの貢納を拒否したため侵攻を受けた［Kirakosyan 1997: 100］。この出来事はアルメニア写本の奥書にも記録されている［Sanjian 1969: 192］。

［Woods 1999: 255 n. 10］。

(3) 教皇ピウス2世（在位1458–64）の著作に，1459年にクヴァルクヴァレ（Gorgora）がブルゴーニュ公国に宛てた書簡が引用されている［Tamarashvili 1902: 594–596; Javakhishvili 1948: 68］。その中でクヴァルクヴァレは，キリスト教徒が協力してテュルク人と戦おうと呼びかけている。さらに翌年，ウズン・ハサンとクヴァルクヴァレは共にピウス2世に使者を送っている［*Commentaries*: 70–71］。

このように15世紀半ばにはアルダビールのシャイフやテュルクメン諸勢力がたびたびグルジスターンに侵入しており，そのことが当時の国際関係を動かす要因になっていたようである。勿論それら度重なる侵入の一つにすぎなかったジュナイドの行動はその主因だったとまでは言えないが，要因の一つに数えることはできるだろう。

6. ジュナイドの最期

その後ジュナイドはシールヴァーンシャー・ハリール・アッラー Khalīl Allāh 1世（在位1417–62）との戦いに赴き敗死することになる。『ハヤーティー史』によれば，両者の対立を煽ったのもまたジャアファルだった。

> ハリール・アッラー・シールヴァーニーのもとにシャイフ・ジャアファルの手紙が届いた。
> 「シャイフ・ジュナイドはずっとカリフ位への願望を抱いており，常に侵略の野心を抱いています。彼がディヤールバクルに向かう前に，信頼できる者たちの協力で心配を取り除きましょう。我々は，ミールザー・ジャハーンシャーの命令で彼をアルダビールから追放しました。彼はやむを得ずディヤールバクルの方に行きました。スルターン・ハサン（ウズン・ハサン）はミールザー・ジャハーンシャーに対して抱いていた憎悪のゆえに，（ジュナイドとの）友情の繋がりを姻戚の規範によって強化しました。そしてカリフ位の一家の弟子たちの一団が，シャイフ・ジュナイドがシャイフたちの許から教導の幸運によってこぼれたにも関わらず，彼に付き従っています。彼を排除することが御自分に必要だと考え，彼という文字を存在のページから抹消した方がいいですよ。」
>
> シールヴァーンシャーはシャイフ・ジャアファルが敬虔者たちのスルターンにとって最大の敵であることを知っていたので，彼（ジャアファル）の誘惑と煽動によって正しき道から足を踏み外した。［*Ḥayātī*: 138］

『ハヤーティー史』はジュナイドとシールヴァーンシャーとの戦いに多くの頁を割いているが，その内容にはあまり目新しい情報はないようである。ここではジュナイドの死の場面のみ引用しておこう。

> 敬虔者たちのスルターンに向けて方々から矢の雨が射掛けられた。一人の親指から放たれた矢によって彼の生命の継続が断ち切られ，彼の（神の）恩寵に満ちた魂は栄光と芳香の歓楽場たる恵みの楽園の住人となり，喜びの破壊者（死）の占有の手が彼の生命の基盤を破壊した。そしてシールヴァーンシャーはこの大きな恐怖と重い出来事を犯したことにより，自らの住処を「まさに地獄こそ住まいである」（Q79-39）の場所に定めた。しかし，不変の天命に抗うことはできず，不変なる（天命の）差配には逆らえない。厳格なる（神の）決定が意志の鎖の天命を揺り動かす時，（神は）海の中の月さえ空中へと達せしめ，天高く飛ぶ鳥さえ地面の奈落へと落とすのである。物事の本質を知る者は卑しい現世の虚栄には目もくれず，消滅の世界などより存

続の喜びをこそ好んだ。彼と結婚の契りを結ぶ者の望みの手は願いの胸には達せず，彼との逢瀬の絆を結ぶ者は心から願おうとも彼から一夜とて享受しなかった。なぜなら，彼において創造主の存続と被造物の消滅は避け難いものだからである。［*Ḥayātī*: 141–142］

おわりに

ジュナイドの死後，息子ハイダルはジャアファルと和解してその娘を娶る。

このようにしてかのお方（ハイダル）が1～2年にわたってアルダビールに留まると，シャイフ・ジャアファルにおいて心の粗野が柔和へと変わり，時には「神は汝らに，預けられたものをその持ち主に返すよう命じる」（Q4-58）という言葉に従って完全なる導師（ハイダル）を教導の地位に据えようという考えが彼の思念に現れたが，再び悪魔の囁きと邪魂の欲求が彼の正義の裾を掴み，彼はミールザー・ジャハーンシャーの方を気にかけ，彼との姻戚関係の泉を濁らせようとはしなかった。雨雲が心地よい芝の庭に天幕を広げ，アトラス織のテントが錆色の天をリスのような灰色の背に背負い，スミレが美女たちの巻き毛の如きバラのまわりに頭を出し，ヒヤシンスが香で書いた甘い言葉の文字のような野生のチューリップと共に現れ，（神の）力の文字で土のページに「我らはそこに泉を涌かせる」（Q36-34）という字が書かれ，芝の上に広げた草のエメラルドの板に「神の慈悲の跡を見よ」（Q30-50）という姿が（現れた）季節，シャイフ・ジャアファルは自らの貞節の娘たちのうちの一人，素晴らしい善意から生まれた貞淑な女性，「人間もジンも彼女たちに触れたことがない」（Q55-58）という夫婦部屋から出た貞節な女性を，完全なる導師に娶せた。彼女の頬の優美さは天国のフールたちを嫉妬の炎で焼き，その歩みの優雅さは直立する糸杉に艶めかしさを教えるほどであった。…（中略）…カリフ位の宝石箱の真珠，聖者性の星，サイイド・ハサン・ミールザーがその高貴な女性から生まれた。そしてその姻戚関係の絆により，完全なる導師とシャイフ・ジャアファルとの間の友好の鎖に強化が生じ，（父ジュナイドから）受け継いだ敵意は完全に良好へと変わった。［*Ḥayātī*: 148–149］

ジャアファルの心変わりの理由はここには示されていないが，後ろ盾であったジャハーンシャーが1467年に没しカラ・コユンル朝も没落してしまったことが背景にあったのは間違いないだろう。ジュナイドとジャアファルとの確執に始まるサファヴィー家内部の対立は，最初から最後までテュルクメン諸王朝の動向と連動していたのである。

おじジャアファルによってアルダビールを追われたジュナイドは，姻戚関係を結んだウズン・ハサンの勢力に便乗して各地を荒らし回りながら信奉者たちと共に戦闘の経験を積んでいったと思われる。それらの戦いは，トラブゾンでもサムツヘでも大量の戦利品を得たことから見て略奪行為の面があったのは間違いないが，『ハヤーティー史』含めサファヴィー朝史料ではジュナイドが不信仰者に対して積極的に行った聖戦とされている。それは，追放されアルダビールを不在にしていたジュナイドの後半生を肯定的に説明するために都合の良い解釈だったろう。そしてジュナイドの死後その集団を継承したハイダルがジャアファルと和解したことにより，サファヴィー教団はジュナイドらによって培われてきた軍事力を取り込むことになった。このように『ハヤーティー史』はサファヴィー教団が軍事力を具えていく過程とその背景をかなり明確にしてくれる。

ジュナイドは後ろ盾であったウズン・ハサンの力を大いに利用していたが，一方ウズン・ハサンにとっても，直接的には軍事行動のための兵力として，間接的には外交交渉を有利に運ぶための圧力として，ジュナイドは格好の手駒だった。政治的変動期にあった15世紀半ばの北西イラン・アナトリア・コーカサスに出没したジュナイドの行動は，各地の政治や外交に直接間接に影響を与えていた。『ハヤーティー史』はそれらの過程について考える上でも貴重な史料と言えるだろう。

参考文献

◉史料◉

Âşıkpaşazâde: *Âşıkpaşazâde Tarihi: Osmanlı Tarihi (1285–1502)*. Ed. Necdet Öztürk. İstanbul: Bilge Kültür Sanat. 2013.

ʿĀlam-ārā: Ibn Rūzbihān Khunjī. *Tārīkh-i ʿĀlam-ārā-yi Amīnī*. Ed. Muḥammad Akbar ʿAshīq. Tihrān: Mīrāth-i Maktūb. 2003.

Aḥsan: Ḥasan Beg Rūmlū. *Aḥsan al-Tavārīkh*, 3 vols. Ed. ʿAbd al-Ḥusayn Navāʾī. Tihrān: Asāṭīr. 2010.

Chalkokondyles: Laonikos Chalkokondyles. *The Histories*. Ed. & tr. Anthony Kaldellis. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. 2014.

Commentaries: Pius II. *Commentaries*. Vol. 3. Ed. Margaret Meserve. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. 2018.

Diyārbakrīya: Abū Bakr Ṭihrānī. *Kitāb-i Diyārbakrīya*. Ed. Necati Lugal & Faruk Sümer. Ankara: Türk Tarih Kurumu. 1962–1964; Rep. Tihrān: Zabān va Farhang-i Īrān. 1977.

Futūḥāt: Ṣadr al-dīn Ibrāhīm Amīnī. *Futūḥāt-i Shāhī*. Ed. Muḥammad Riżā Naṣīrī. Tihrān: Anjuman-i Āthār va Mafākhir-i Farhangī. 2004.

Ḥabīb: Khvāndamīr. *Tārīkh-i Ḥabīb al-Siyar*, 4 vols. Ed. Muḥammad Dabīr Siyāqī. Tihrān: Kitābfurūshī-i Khayyām. 1983–4.

Ḥawâdith: William Popper. *Extracts from Abû'l-Maḥâsin Ibn Taghrî Birdî's chronicle entitled Ḥawâdith ad-duhûr fî madâ 'l-'ayyâm wash-shuhûr*. Vol. 2. Berkeley: University of California Press. 1931.

Ḥayātī: Qāsim Beg Ḥayātī Tabrīzī. *A Chronicle of the Early Safavids and the Reign of Shah Ismāʿīl (907–930/1501–1524)*. Ed. Kioumars Ghereghlou. New Haven: American Oriental Society. 2018.

Jahān-ārā: Qāżī Aḥmad Ghaffārī. *Tārīkh-i Jahān-ārā*. Ed. Mujtabā Mīnuvī. Tihrān: Kitābfurūshī-i Ḥāfiẓ. 1343Kh/1964.

Javāhir: Būdāq Munshī Qazvīnī. *Javāhir al-Akhbār*. Ed. Muḥsin Bahrām-nizhād. Tihrān: Mīrāth-i Maktūb. 2000.

Kartlis: *Kartlis Tskhovreba*. Vol. 2. Ed. Simon Q'aukhchishvili. Tbilisi: Sakhelmts'ipi gamomtsemloba «Sabch'ota Sakartvelo». 1959.

Khulāṣat: Qāżī Aḥmad Qummī. *Khulāṣat al-Tavārīkh*. 2 vols. Ed. Iḥsān Ishrāqī. Tihrān: Muʾassasa-ʾi Intishārāt va Chāp-i Dānishgāh-i Tihrān. 2004.

Lubb: Yaḥyā b. ʿAbd al-Laṭīf Qazvīnī. *Lubb al-Tavārīkh*. Ed. Mīr Hāshim Muḥaddith. Tihrān: Anjuman-i Āthār va Mafākhir-i Farhangī. 2007.

Silsilat: Ḥusayn Pīrzāda Zāhidī. *Silsilat al-Nasab-i Ṣafavīya*. Ed. Ḥusayn Naṣīrbāghbān. Tihrān: Armaghān-i Tārīkh. 2016.

Tʿovma: Tʿovma Metsopʿetsʿi. *Patmutʿiwn Lank-Tʿamuray ew Yajordatsʿ Iwrotsʿ*. Ed. I Gortsatan K. V. Shahnazarean, Paris: E. Thunot. 1860.

Ẕayl: Amīr Maḥmūd b. Khvāndamīr Haravī. *Īrān dar Rūzgār-i Shāh Ismāʿīl va Shāh Ṭahmāsb Ṣafavī*. Ed. Gulāmriżā Ṭabāṭabāʾī Majd. Tihrān: Intishārāt-i Mawqūfāt-i Duktūr Maḥmūd Afshār Yazdī. 2012. (= *Ẕayl-i Ḥabīb al-siyar*)

◉研究文献◉

Babayan, Kathryn. 2009. "Jonayd." *Encyclopædia Iranica*. http://www.iranicaonline.org/articles/jonayd. Last updated 2012.

Bedrosian, Robert Gregory. 1979. *The Turco-Mongol Invasions and the Lords of Armenia in the 13–14th Centuries*. Ph. D. Dissertation. Columbia University.

Brosset, Marie-Félicité. 1849. *Histoire de la Géorgie depuis l'antiquité jusqu'au XIXe siècle*. 1re partie. S.-Pétersbourg: Imprimerie de l'académie impériale des sciences.

Ghereghlou, Kioumars. 2016. "Ḥaydar Ṣafavi." *Encyclopædia Iranica*. http://www.iranicaonline.org/articles/haydar-safavi.

Ghereghlou, Kioumars. 2017. "Chronicling a Dynasty on the Make: New Light on the Early Ṣafavids in Ḥayātī Tabrīzī's *Tārīkh* (961/1554)." *Journal of the American Oriental Society* 137(4): 805–832.

Glassen, Erika. 1970. *Die frühen Safawiden*

nach Qāżī Aḥmad Qumī. Freiburg i. Br.: K. Schwarz.

Gronke, Monika. 1993. *Derwische im Vorhof der Macht: Sozial- und Wirtschaftsgeschichte Nordwestirans im 13. und 14. Jahrhundert*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Hewsen, Robert H. 2001. *Armenia: A Historical Atlas*. Chicago & London: University of Chicago Press.

Hinz, Walther. 1936. *Irans Aufstieg zum Nationalstaat im fünfzehnten Jahrhundert*. Berlin: Walter de Gruyter.

Javakhishvili, Ivane. 1948. *Kartveli eris ist'oris*. Vol. 4. Tbilisi: St'alinis sakhelibis Tbilisis Sakhelmts'ipi Universit'et'is gamomtsemloba.

Kaldellis, Anthony. 2014. *A New Herodotos: Laonikos Chalkokondyles on the Ottoman Empire, the Fall of Byzantium, and the Emergence of the West*. Washington, D. C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Kirakosyan, G. E. 1997. *Hayastanə Lank-Tʻamuri yev Tʻurkʻmen tsegheri arshavankʻneri shrjanum (1386–1500 tʻtʻ.)*. Yerevan: HH GAA «Gitutʻyun» Hratʻarakchutʻyun.

Kırzıoğlu, M. Fahrettin. 1992. *Yukarı-Kür ve Çoruk Boyları'nda Kıpçaklar*. Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi.

Mazzaoui, Michel M. 1972. *The Origins of the Ṣafawids: Šīʿism, Ṣūfism, and the Ġulāt*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

Peacock, Andrew. 2012. "Between Georgia and the Islamic World: the Atabegs of Samcʻxe and the Turks." *At the Crossroads of Empires: 14th–15th Century Eastern Anatolia* (Deniz Beyazit, ed.), 49–70, Paris: Institut français d'études anatoliennes Georges-Dumézil.

Quinn, Sholeh A. 2000. *Historical Writing during the Reign of Shah ʿAbbas: Ideology, Imitation and Legitimacy in Safavid Chronicles*. Salt Lake City: The University of Utah Press.

Roemer, Hans Robert. 1989. *Persien auf dem Weg in die Neuzeit: Iranische Geschichte von 1350–1750*. Beirut & Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Sanjian, Avedis K. 1969. *Colophons of Armenian Manuscripts, 1301–1480: A Source for Middle Eastern History*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Savvidēs, Alexēs G. K. 2009. *Istoria tēs autokratorias tōn Megalōn Komnēnōn tēs Trapezountas (1204–1461)*, 2nd ed. Thessaronikē: Ekdotikos Oikos Adelphōn Kyriakidē.

Shukurov, Rustam. 1993. "The Campaign of *Shaykh* Djunayd Ṣafawī againt Trebizond (1456 AD/860 H)." *Byzantine and Modern Greek Studies* 17: 127–140.

Stickel, Farida. 2019. *Zwischen Chiliasmus und Staatsräson: Religiöser Wandel unter den Ṣafaviden*. Berlin: De Gruyter.

Tamarashvili, Mikel. 1902. *Ist'oria k'atolik'obisa Kartvelta shoris: namdvilis sabutebis shemot'anita da ganmart'ebit XIII sauk'unidan vidre XX sauk'unemde*. Tpilisi: Elekt'r. Sabech'di St'amba Kart. Ts'ig. Gam. Amkh.

Woods, John E. 1999. *The Aqquyunlu: Clan, Confederation, Empire*, rev. ed. Salt Lake City: The University of Utah Press.

Yacızı, Tahsin. 1993. "Cüneyd-i Safevî," *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm ansiklopedisi* 8: 123–124.

北川誠一 1977 「イルニハン国の西南グルジア支配とサムツヘ・アタベギ領（サアタバゴ Saatabago）の成立」『史朋』7: 9–24.